

視 察 報 告 書

報告者氏名 楠山 栄子

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日

令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

(1) 熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

(2) 熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

(3) 鹿児島県霧島市

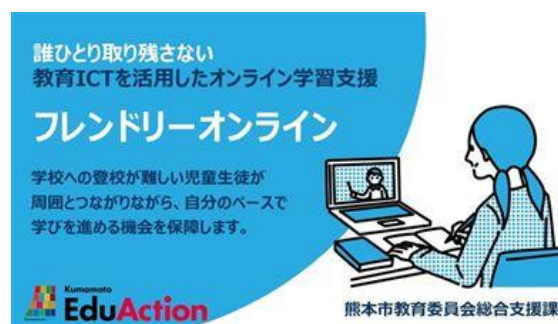
ア 霧島市こども館について

4 所感等

1日目：熊本市不登校支援の取り組みについて

フレンドリーオンライン～誰ひとり取り残さない教育のカタチ～

不登校問題は今全国的に急拡大しており、流山市にとっても深刻な問題である。熊本市は全国に先駆け、不登校児の増加に対して、学校への登校が難しい児童生徒への学習支援として、教育ICTを活用したオンライン学習支援（フレンドリーオンライン）を行っている。



フレンドリーオンラインの内容

熊本市内の、学校への登校が難しい小・中学生が対象に、オンライン学習支援員による学習支援配信拠点校からオンライン学習支援員や拠点校の先生がオンラインで学習支援を行う。支給されているタブレットやパソコン等、インターネットに接続できる機器で授業に参加。費用は無料。レクチャー機能等を使って、単元の学習内容を学び、ドリル機能でチェック。ドリルの結果をAIが分析し、理解の足りないところを問題で出してくれる。チャット機能やリアクションボタン、イロイロノート等を活用して双方向のやりとりをしながら学習支援を行う。社会とつながるわくわく学習も。配信拠点校からの学習支援だけでなく、月に数回熊本市内の様々な場所から出前授業を配信。（熊本城や博物館、美術館、動植物園等から配信。施設に関するクイズ出題。専門的な話をしてもらう。）欠席の連絡は必要ない。児童生徒のペースに合わせて参加できる。参加状況を、通っている学校に知らせる。参加日は指導要録上の出席扱いの対象となる。オンラインによる相談・対話。毎月、スクールカウンセラーが様々なテーマで話す。スクールカウンセラーに相談可。（対面も可）大学生と対話をするユアフレンド事業。

フレンドリーオンラインへの評価

- ・生活リズムがとりもどせた、
 - ・朝起きるのが苦手だったが、オンラインに参加するために起きるようになった、
 - ・自分のペースに合わせて学習に取り組める。
 - ・熊本市内には、フレンドステーションがあるが、こうしたオンラインでの緩やかな参加の形は好ましい。
- このオンライン授業によって、児童生徒、保護者ともに、希望の光が見えてきたとの声も。

視察の目的である「流山市にこの視察をどうやって生かしていくか」であるが、流山市の不登校児童の割合も熊本市と比較して、決して低くはない。不登校対策は熊本市同様、流山市にとっても

喫緊の課題である。同じ方法が通用するかどうかはわからないが、この事業での、先生方の熱意のある取り組みがとても印象的だった。現場の先生の熱意によって、上司や他の先生方を巻き込んだのではないかと委員の方々と話し合ったが、結論は、議員から声を上げるよりも、現場にいる先生方から声がかかることが大事、という点で一致した。そういう声が出たとき、議員は期を逃さず、バックアップすることが何より大事だろう。

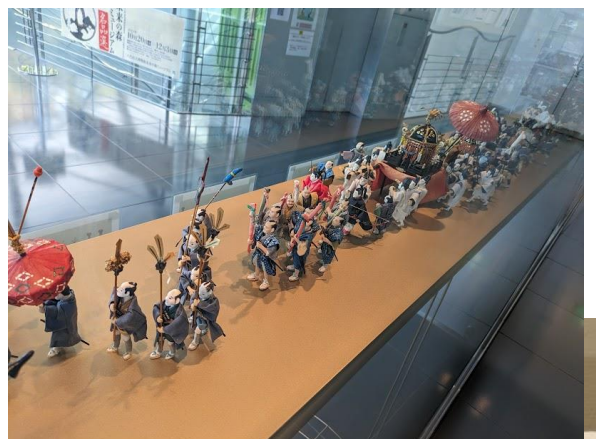
2日目：八代市立博物館の運営について

くまもとアートポリス参加作品で、世界的建築家伊東豊雄氏が設計した八代市立博物館・未来の森ミュージアムを視察した。

この博物館は、歴史・美術工芸などを専門とする郷土博物館で、文化財保護法に基づく文化庁の公開承認施設でもある。(熊本県では、県立美術館とこの博物館のみ)

エントランスホールでは、ユネスコ無形文化遺産「八代妙見祭の神幸行事」の江戸時代の姿を再現した模型が展示されており、常設展示では、八代城主を勤めた松井家伝来の品々や八代焼(高田焼)、肥後罈、古墳や城跡からの出土品など、みごとな名宝が揃っている。八代の歴史と文化をしっかりと伝えている。なかでも、旧八代城主松生の名宝は実に豊富で、圧巻。

館内にはカフェもあり、休憩をしながらじっくりと博物館を見学できる。博物館ファンにはたまらない場



すんごん ふうごもん ちづく
寸分のずれもない鱗文が美しい

そうごんろうこもんちやわん
12 象嵌鱗文茶碗

1口 八代焼

上野熊次郎(1848-1908) 江戸時代末期~明治時代(19世紀)

端正な器形の平茶碗(見込みの浅い夏用の茶碗)。口縁下

にくるりと雷文をまわし、その下から高台盤まで隙間なく

35

所となっているはずである。

残念ながら訪れる時間はなかったが、博物館の前には、八代城主・松井直之（まついなおゆき）の江戸時代初期の大名庭園、松濱軒（しょうひんけん）があり、博物館のまわりの一帯は八代城跡も含め、八代の江戸時代をしっかりと伝えている。

視察の目的である「流山市にこの視察をどうやって生かしていくか」。八代市は、この建物ができた当初、博物館を独立させるか、あるいは、図書館と併設させるかという課題があったと聞く。結果的には、現在の立派な独立した博物館となったが。保管されているその数、中身を振り返ると、確かに独立した博物館の選択でよかったと思う。一方、流山市には歴史好きの市民も多く、流山の歴史を高く評価する声は市外からも強く聞かれるが、現在は、図書館と博物館の併設である。狭い敷地の中で、なんとかやりくりして、流山の歴史と文化をしっかりと伝えている。ところが、昨今は、本市は、人口流入と同時に、学校等、公共施設の建設に追われ、県内一発掘調査が多い自治体となっている。発掘調査が増えるにつれ、市の文化財も増えている。三本松古墳等、ぜひ常時公開してもらいたい埋蔵物が増えた。近い将来、図書館と博物館の併設ではなく、独立した博物館を考える時期がくるのではないだろうか。

3日目：霧島市こども館について

鹿児島県霧島市の東部の標高200mの台地に位置する小高い丘の上に霧島市こども館がある。かつては、国分ハイテク展望所と呼ばれた展望所だったので、眺望は抜群。霧島市街地、霧島連山、錦江湾、桜島が一望できる。展望台の外観は残ったままに、1億7000万円かけてリニューアルし、運営は外部の指定管理者に委託している。



子ども館の対象は、未就学児から小学生まで年齢別にエリアが分かれて（1～3歳を対象としたフレッシュファーム、6歳～12歳を対象とした、わんぱく森のツリーハウス）各階には、職員の方が見守っていて素晴らしく安心安全の子育て支援施設である。乳幼児を対象としたあそび広場や授乳室もあり、まさに至れり、尽くせりの子ども館である。3Fの休憩室は、国分展望台だったので、展望台からのパノラマ絶景が見える。

このように、霧島市の子育て環境は素晴らしい。知育部屋、運動部屋も整備し、子育て世代にとって子どもを遊ばせる場所として最高の場所である。利用者は市民だけでなく、市外の方も多いというのもうなずける。一点、残念なのは、アクセスの問題。市街地から離れており、アクセス



するためには車が必要であるという点。車を利用される方は市内はもちろん、市外の方も多いのは納得であるが、利用したくても利用できない方は多いのではないかと。もったいないと思うが。

さて、視察の目的である「果たして流山市にこの視察をどうやって生かすのか」。霧島市のこども館は、霧島市という地形、環境の中で生まれた子ども館と考える。流山市には市内各所に、児童館を配置し、子育て環境を提供しているが、こうしたのびのびと広い敷地に建てられる子ども館はまず、実現困難のように考える。霧島市にはもう一館、新しい子ども館を作る動きもあると聞くと聞くと、土地の余裕もあまりない流山市にとっては、うらやましい限りの子ども館である。けれど、ぜひ参考にさせていただきたいのは、この館内で整備されている知育部屋、運動部屋などの子育てのノウハウではないか。

視 察 報 告 書

報告者氏名 阿部 治正

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日

令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

（2）熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

（3）鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

4 所感等

（1）熊本市の不登校支援の取り組みについて

熊本市が取り組んでいる不登校支援の施策の詳細情報については、インターネットなどで容易に入手できるので、ここではその取り組みについての私なりの評価や感想などを主に記すことにします。こうした報告スタイルは、以下、八代市や霧島市の視察についても同様とします。

まず、熊本市の不登校支援の基本姿勢が、不登校の子どもたち自身にしっかりと寄り添いつつ、不登校によって起きる困りごとの解決を支援していくのだという点に置かれているように思えた点に、共感を覚えました。

そうした基本姿勢は、例えば支援事業の柱の一つであるインターネットを活用した「フレンドリーオンライン」は、その子ども

の管轄校を窓口とはせず、教育委員会管轄のフレンドリーオンラインへの直接申し込みとする。しかも正式の参加だけではなくトライアル的な参加を認める。また名前や顔出しやその他の属性など個人のアイデンティティの公表を求めない。公表のエネルギーを有しないから不登校になっている子どもたちにそれを求めることは逆効果となるので、そのエネルギーが回復するのを支援しながら待つことを重視する等々。総じて、不登校の子どもたちが置かれている客観状況だけでなく、内面の実情をよく理解した上での丁寧な対応の中に、教育委員会の姿勢がよく表れているように思いました。

また、上で紹介したネットを介した「フレンドリーオンライン」の対極に立つ「教室での指導」においても、学校の授業配信なども試みており、きめ細かな対応を行っています。

さらに、教室とオンラインの中間に位置する「通所型の指導」においては、正規の学校以外にフリースクールと積極的に連携していますが、この点は他の自治体のフリースクール活用の取り組みと比べても先行しているように思いました。熊本市内には、熊本市教育委員会のサイトを見る限り、数十を数えるフリースクールが活動をしており、この点も、同規模の自治体と比べても特異な状況のように思います。

以上見たように、熊本市の不登校支援の取り組みは、正規の学校指導、フリースクールも含む通所型の指導、そしてインターネットを活用したフレンドリーオンラインの三つの受け皿で成り立っています。今後の可能性としては、特に正規の学校とフレンドリーオンラインとが、一方でそれぞれの良さや持ち味により磨きをかけつつ、他方で何が子どもたちにとって有益であるかという点でお互いに競い合っていければ、不登校の子どもとそうでない子どもたちの双方にとって、より望ましい教育の姿に近づくことが出来るのではないかと思います。

(2) 八代市の市立博物館の運営について

「未来の森ミュージアム」の名も持つ八代市立博物館は、まずその建物が、「くまもとアートポリス 92」の参加作品として、ユ

ニークで優れたデザイン性の点で高い評価を受けているようです。博物館の性格としては、人文系博物館（歴史・美術工芸品などを専門とする郷土博物館）だとされています。

博物館のこの性格が良く活かされた企画や展示がなされているとも思いましたが、その背景には八代市を成り立たせている長い歴史や奥深い文化などの存在があるように思います。九州地方の八代の地域は、原始時代後期や古代には熊襲と呼ばれた西日本でも有数の力を持った部族連合が支配した地域、そして大和朝廷側に付く勢力が拮抗していた地域でした。いずれにしても当時としては大きな経済力と政治力を誇る人々が暮らしていた地域であったと言われています。その後も、中国大陸との交流や、戦国時代における武将たちの活躍、幕末維新の中でも八代を含む熊本地方は重要な役割を果たした地域でした。

八代市博物館に収蔵されている考古・歴史・美術工芸・民族資料も、そうした歴史の厚みを窺わせるに十分な品々となっています。縄文遺跡から発掘された土器類などから始まり、八代城主を務めた松井家伝来品や、八代焼や肥後罈、宮地和紙、染韋などの美術工芸品、中国から伝わった妙見祭資料、八代城跡模型、各時代の歴史資料など、過去から現代に至る八代の歴史と文化が豊富に展示されている様は、歴史好きの者にはまさに圧巻と言えます。

しかし展示物についての感想から離れ、博物館の運営の点に目を移せば、やはり様々な課題が横たわっていることが、市の担当課の方の説明からも分かりました。入館者の安定的な確保、建物や設備の管理に要する経費、収蔵物を経年の劣化などから保護したり修復したりするための経費等々、歴史資料や文化財を保存し、展示し、市民の生涯学習の素材として提供し続けることは容易な課題ではないということが伺えた視察でした。

（3）霧島市こども館について

霧島市こども館は、市の西部の山間部に建てられていた「テクノ展望台」という既存施設を改修し、新たに設置された子育て施設です。車に乗って、途中にハイテク企業の建屋が連なる光景などを眺めながら15分ほど登ると、山頂にたたずむこども館に到着

します。こども館に入館してまず驚かされたのは、3階の「てんぼう・きゅうけいルーム」から見た眺望です。眼下には、霧島の市街地と錦江湾が広がり、その向こうに噴煙を上げる桜島が大きく横たわっています。それらの光景が、まさに巨大な箱庭のように目に入ってくるのです。訪れる者は、大人も子どもも、目の前のこの一望がすなわち「霧島」なのだとの強い印象を持つに違いありません。3階は全体のコンセプトが「遊びの砂漠」となっており、「てんぼう・きゅうけいルーム」の外が子どもたちの遊び場になっています。

すぐ下の2階はルームコンセプトが「遊びの森」とされ、フロアの左の部屋が「からだ・うんどうルーム」、右の部屋が「えほん・ちいくルーム」に分けられています。いずれも2歳から6歳児までが対象となっており、「からだ・うんどうルーム」にはトランポリン、ボルダリングが設置され、部屋の奥に行くにつれて床が滑り台状に勾配を増していく構造で作られています。そして「えほん・ちいくルーム」には、運動系とは違った知育系の大小の遊具が置かれています。

さらに下の1階はルームコンセプトが「遊びの草原」で、「授乳室」、2歳から4歳までが対象の「ハイハイ・よちよちルーム」、もう少し大きい子どもも遊べる半屋外の「ソラノ広場」、そして受付や食堂や厨房が設けられています。さらにその屋外には、小学生までを対象とした小規模なアスレチック系と呼べるような遊具が設置され、またログ材で作られた休憩所なども置かれています。

このこども館を全体としてみた場合、子どもと保護者が、一緒になって体を動かし、心をわくわくさせながら遊べる施設という事になると思います。それは同時に、子どもにとっても保護者にとっても、日常のルーチンや煩事から解放された時間を得られるストレス発散と癒しの場所と言っても良いかもしれません。

このこども館は子育てに関する相談に応じる機能を部分的には持っていますが、それは本格的な役割とは位置付けられていません。相談業務によりふさわしい施設は、このこども館の様に市内に一カ所か二カ所だけ、しかも車に乗らないと来られない場所で

はなく、市内に数カ所、車などを持たずとも通える施設でなければならぬはずだからです。

こども館の運営は、霧島市の直営の下で、事業者による業務委託をしつつ行っています。運営に指定管理者を導入することは、施設利用を無料としていることなどもあり、現状では難しいが、今後の検討課題とする。また庭園の管理・清掃・設備の保守等は別途各事業者による業務委託をしており、次期の契約では包括管理委託を導入する予定になっているという職員の説明でした。

現状では、子育て施設の既成のカテゴリーには属さない施設とも言え、国からの補助金や負担金は受けずに運営されています。今後は、施設の行政施策上の位置づけ、他の子育て施設との間での機能や役割の棲み分けと相互の関係の明確化などが課題となることが予想される事業のように思われます。

視察報告書

報告者氏名

矢口輝美

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日 令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

- (1) 熊本県熊本市
 - ア 不登校支援の取り組みについて
- (2) 熊本県八代市
 - ア 八代市立博物館の運営について
- (3) 鹿児島県霧島市
 - ア 霧島市こども館について

4 所感等

【熊本市の不登校児童生徒の支援について】

国の調査を見ても、不登校の児童数が増加しているのは明らかであり、各自治体は手探りで支援策を考えている状態である。熊本市では、学校での支援だけではなく、別教室での対応、授業配信、教育支援センターでの取り組みとは別に、【フレンドリーオンライン】という独自の取り組みを行っている。

文科省では不登校を年間30日以上欠席をした児童生徒として定義しているが、途中で学校に復帰出来たとしても不登校児童生徒とカウントされてしまうため、年間100日以上欠席している児童生徒のうち、

- ①適応指導教室
- ②フリースクール
- ③オンライン学習支援
- ④別室対応

そして、①～④以外のどこにも繋がっていない児童生徒数を把握し、その生徒に対する支援を始めた。

不登校児童生徒の支援は、学校復帰が第一の目的ではなく、社会的自立が目的であるとして、フレンドリーオンラインでは子ども達が求めている事、保護者が求めている事のヒアリングを継続し、2つの小規模校にスタジオを設置し、朝から午後まで参加出来るオンラインのカリキュラムを展開、子ども達が自由に進度を選べる工夫や外出に繋がるような仕掛けを実施し、学習機会の保障をしている。

学校現場からは、こういう取り組みをするから不登校が増えるのではという厳しい意見もあったようだが、学校がそもそも何のためにあるのか、社会全体で考える必要があるという事を改めて感じた。

【八代市立博物館未来の森ミュージアムの取り組みについて】

八代市立博物館未来の森ミュージアムの建物は、くまもとアートポリス 92 参加の建

築作品で平成3年10月25日に開館された。常設展示室は2つあり、第一常設展示室では考古・歴史・美術工芸・民族の4つのコーナーを設けて年4回程度の展示替えを行いながら、八代の歴史と文化を紹介。第二常設展示室では一般社団法人松井文庫が所蔵する旧八代城主松井家に伝来した絵画・能面・能装束・甲冑・漆器などの美術品を年4～5回展示替えを行いながら紹介。特別展覧会は年4回企画、春季展では全国各地の名品を八代にいながら鑑賞する機会を。夏季展では夏休み中の子ども達が地域の歴史や文化を楽しく学べる機会を。秋季展では八代市の歴史と文化を独自の調査研究により解き明かし、その魅力を発信。冬季展では城下町文化や八代の歴史的価値の高い文化財を紹介している。そして展示されている作品は全て撮影可であり（一部借用している作品は不可）、自由に SNS で発信して良いという取り組みを行う事で、来場者に広報を担ってもらい取り組みを行っている。

また調査研究活動として、一般社団法人松井文庫に所蔵されている古文書約1万点のうち、毎年約250点の調査・整理・保存・活用を行い、年間200点程度を解読し、解読が終了すると、適宜調査報告書として刊行している。

全国には歴史や文化を次世代に繋いでいくためにご尽力されている美術館・博物館などが存在しているが、予算の枠がある中で、お金をかけるべき所がどこなのか、稼げる事業でなくても、守るべき事業はあるが、今後も継続していけるのかについては、しっかり検討する必要があると感じた。

【霧島こども館すかいぴあの取り組みについて】

霧島こども館すかいぴあは元々観光課の所管であった展望台を子ども支援課に移管する事でこども館に改装したもので、市役所から車で20分程度、山の頂上にあつた。

すかいぴあのまわりには大きな遊具が沢山設置してあり、建物に入ると、1階は0～2歳未満の子ども達のための部屋とレストラン、2階には2歳～6歳までの子ども達のための知育の部屋と身体を動かす部屋、そして3階は元々の展望台を活かし桜島を望む事が出来る休憩所になっていた。

このような素晴らしい施設を無料で利用出来るのはとても良いと思うが、そもそも車がないと行けないような場所であり、基本的に昼間、親子で遊ぶ場所となっている事から、利用者は限られるのではと感じた。

視 察 報 告 書

報告者氏名 桑畑伴子

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日

令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

（2）熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

（3）鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

4 所感等

熊本市では不登校支援の取り組みをお聞きしました。不登校児童生徒の支援には、1 教室での支援 2 別教室での支援 3 学校の授業配信 4 フレンドリー（教育支援センター） 5 フリースクール 6 フレンドリーオンラインといった支援がありました。

熊本市独自で100日以上欠席がある不登校児童生徒がどのように学習をしているのかなど、調査したところ①公的機関②フリースクール③オンライン学習支援④別室。そのどこにもつながっていない児童生徒が57.3%いることがわかり、その児童生徒の数を減らしていこう。学校復帰を考えるのではなく社会的な自立のため、学習の保障ではなく、学習機会の保障が重要であると考え『フレンドリーオンライン』を、独自の取り組みとして紹介していただきました。

フレンドリーオンラインでは、児童生徒が求めていること、保護者が求めていることを定期的に児童・保護者聞いていきながら、現在のフレンドリーオンラインのかたちができあがり、最初はオンラインの画面は真っ暗な状態でしたが、だんだんと自分の代わりにぬいぐるみを自分として画面に出すまでになってきたそうです。これらの取り組みの結果、不登校児童生のうち、どこにもつながっていない児童生徒の割合が令和2年の57.3%から令和4年度には44%までになったそうです。取り組んでいる方の熱意を感じました。試行錯誤しながらこれからも子供たちの為にさらに取り組んでいきたい、と話されていました。人口が多い市ではありますが、不登校に対しての取り組みが多岐にわたり選択肢も広がり、学校との連携もされていることが素晴らしいと思います。

次に、八代市へ。市立博物館未来の森ミュージアム周辺は、八代城跡、市立図書館、市民会館、旧八代城主松井家の庭園「松浜軒」などがあり、歴史と文化が漂う場所に博物館は建てられておりました。特徴としては、1、人文系博物館2、くまもとアートポリス92参加の建築作品（国際的な建築家伊東豊雄氏の設計）3、文化財保護法に基づく文化庁の公開承認施設4、旧八代城主松井家の名宝（一般財団法人松井文庫所蔵）を展示紹介。建物は低く見えるけれども4階まであり、空調湿度、温度管理もされていました。

子ども達が楽しく歴史を学ぶために、学習に合わせた展示や、出前講座なども行うなど工夫をしていました。限られた予算の中で運営する難しさ、歴史、文化を残していくためにもお金がかかる、しかし残すべきものは後世に残したいと思いました。この博物館は、カメラ撮影が出来る貴重な博物館でした。

霧島市こども館スカイピアまでは、車で行かなければ行かれない場所ではありますが、自然豊かな山の上であり、遊具や芝生ベンチもあり外遊びものびのびできる場所です。以前は展望台だった所を、こども館にしたそうです。中に入ると子供たちが楽し

視 察 報 告 書

報告者氏名

乾 えり

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日

令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

（2）熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

（3）鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

4 所感等

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

熊本市の不登校児童生徒数は、令和4年度で小学校中学校合わせて2760人にのぼる。コロナ禍で当たり前が崩れ、低年齢化し、小学校からの不登校が増加した。文科省の不登校の定義は年間30日以上欠席だが、欠席後登校するようになっても、週1回休みで年間30日以上でも、一日も登校しなくても「不登校」とされる。これを同じ対応でいいのか検討し、年間約200日の登校日数の約半分100日以上欠席がある児童生徒を明らかにし、そのうち「①公的機関（適応指導教室等）②フリースクール等③オンライン学習支援④別室」のどこにもつながっていない児童生徒数を出した。

100日以上欠席の児童生徒中どこにもつながっていない児童生徒は、令和2年度で57.3%、令和4年度で44%であり、これだけ孤立している児童生徒がいることが明らかになった。

これまで不登校児童生徒の報告は文章で行っていたが、令和4年で2700人いる不登校児童生徒では報告で精いっぱいであり、「どこにもつながっていない児童生徒」を「見える化」するため、つながりをチェックできる一覧を作った。これにより、学校の負担も軽減され、つながりのない子が多い学校には電話などで助言することができ、つながりのない子が減ってきている。

一方、コロナ禍による臨時休業で2020年授業のオンライン配信を始めた。臨時休校中にオンラインによる健康観察などやり取りができた不登校児童生徒は5割前後、オンライン授業に入ることができたのは4割弱、学校再開後登校できたのは3～4割と、オンラインの不登校対策の効果が確認できた。（当時は全員がオンライン、現在はベースが登校という違いはある）

不登校児童生徒への支援の在り方についての文科省の方針が学校復帰だけでなく、「社会的な自立」を第一の目的とする方向に転換された。不登校児童生徒の支援体制として、現在教室での支援・別教室での支援・学校の授業配信（直接学校とつながるもの）のほか、学校外の教育支援センター（フレンドリー、市内6か所）、民間フリースクール、さらにフレンドリーオンラインがある。

フレンドリーオンラインは、当初教室の配信から始まったが、これは受け手からは一方的に流れるものであり、「教室の子どもの中が映るため気持ちが落ちる」などの声もあった。そこで教室とは別の小規模校2校をフレンドリーオンライン配信拠点校とし、空き教室にスタジオを設け、元管理職の再任用の先生などによる独自の授業を配信する形となった。

上記は熊本市教育委員会の総合支援課学校サポート班宮津氏から伺った内容の前半である。このあと実際にどのような授業配信がされているか、学習ソフトで何を使っているかなどのお話があったが、前半部分がとりわけ大事に思われたので、詳述した。

「誰ひとりとり残さない」という言葉は昨今よく使われるが、

誰がとり残されているのかが明らかにされなければ、すべきことがはっきりしてこない。熊本市の取り組みはそこが明確である。そしてオンラインを使えばよいということではなく、不登校の児童生徒の気持ちに寄り添い、学習機会の保障のために何が必要か、きめ細かく考え抜いていることに感動した。

「ICTを活用したオンライン学習支援」と銘打っているので、そこに目が行きがちだと思うが、子どもたちに何が必要かをまずしっかり据えなければ、オンラインを使っても空回りになるだろう。その議論をしたうえで、流山でもこのようなシステムの導入を検討していければと考える。

(2) 熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

「くまもとアートポリス'92」の参加作品であったという斬新な建物がまず目を引く。城跡を背負う歴史の厚みのある地域で、旧八代城主の名宝等、博物館の所蔵品の質も高く豊富である。春夏秋冬に年4回の特別展を企画し、魅力ある内容を打ち出している。児童生徒への解説などの活動も活発である。

費用面では年間約1億5千万円の経費がかかり、入館料は微々たるものなので、それ自体が収益を生み出すものではない。水準の高い文化を市として大切にしているということだと感じた。

(3) 鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

桜島を眼下にのぞむ素晴らしいロケーションの山の上に施設が建っている。もともと市所有の観光施設だったということだ。屋外には大型の遊具があり、屋内は就学前の子供たちを安心して遊ばせることができる部屋が用意されている。子連れで遊びに来たらゆっくり時間を過ごせる施設である。こども館の営業時間以外は、屋上などで観光できる。

観光地と子ども施設を兼ねた、新しい発想ともいえるが、町中からはかなり離れた山間部にあり、車以外の交通手段がなく、利用できる人が限られるのが課題だと感じた。

視 察 報 告 書

報告者氏名 坂巻儀一

1 委員会名

教育福祉委員会

2 期 日

令和5年11月7日（火）～同9日（木）2泊3日

3 視察地及び調査事項

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

（2）熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

（3）鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

4 所感等

（1）熊本県熊本市

ア 不登校支援の取り組みについて

「誰ひとり取り残さない」教育 ICT を活用したオンライン学習支援に取り組む熊本市のフレンドリーオンラインは、そのベースに同市は、新学習指導要領の実施を見据えて、2017年度から教育のICT化に取り組み、2018年度から市内の小中学校に段階的にタブレット端末を配備し、2020年4月にはすべての学校で「教員1人1台、児童生徒3人に1台」を実現しました。その環境が奏功しコロナ禍の一斉休校時も、4月半ばには市内すべての小中学校でオンライン授業を始めることができました。

これらシステムの構築によりその一斉休校時に、「不登校生がオンライン授業に参加できた」という声も上がってきたという。

ある中学校では、オンラインで参加できた不登校生に対して、学校再開後も各教科担当の教員たちが日替わりで毎日1時間、オンラインで個別に学習支援を行った。すると、その生徒は放課後に学校に顔を出すようになり、3学期からは登校できるようになったという。それはオンラインは自分に合ったペースで学べるメリットがあると考え、登校が難しい児童にとっては、たとえ完全登校ができなくても、学校と繋がるだけでも何か違ってくることがあるのかもしれないとの考えの元、学校側はその児童がどこかに繋がっているか否かを事前にチェックしていったという。

こうした中、市教委はさらなる支援の充実を目指して2023年1月より2次元の仮想空間を利用した「バーチャル教室」の運用に、すさらネットというAI型学習アプリを使い始めた。

これらによりそれまでのオンライン授業では顔を出せなかった児童も不安なく交流できるようになるには、メタバースの活用も有効なのではないかと考えたそうです。

一昔前では考えもできなかった手法と思われるが、現代の児童たちが慣れ親しんだゲームやバーチャルの要素をも取り込み、児童たちが学校、教育支援センター、フリースクールなども含め、もっと自由に自分なりに選んで学べるようにしていくシステムは驚きでありました。

(2) 熊本県八代市

ア 八代市立博物館の運営について

八代市立博物館未来の森ミュージアムは、伊藤豊雄建築設計事務所による設計で、くまもとアートポリスに参加し、くまもと景観賞、アーキテクチャー・オブ・ザ・イヤーなどを受賞。伊東豊雄が公共建築物に初めて携わったプロジェクトである。

視覚的な高さが抑えられたヒューマンな環境を考慮し、建物の威圧感を軽減することに大きな注意がはらわれた。1階部分には閉鎖性が高くボリュームの大きな2つの展示室が配され、あたかも地下であるかのように盛土によって埋められている。平坦な敷地に芝生で覆われた小高い丘が隆起したかのように見える。丘の上にはエントランスホールやカフェなどのオープンなスペースが

存在している。

1991年に開館され、旧八代城主である松井家が所蔵する様々な美術品を中心に、過去から現在に至るまでの八代の文化と歴史を紹介する博物館である。

展示品の中には、徳川家康が関ヶ原合戦前に浅野長政に送ったとされる書状や第一次朝鮮出兵時に豊臣秀吉が発した朱印状などの現物の展示がなされていて目を見張るものがあった。また一部を除く展示品のほとんどを写真撮影可としているのは、一般的には博物館としては珍しく来場者にとってはありがたい点である。

しかしながら入場料や数年間の入場者数、リピート数に鑑みればその壮大な建造物に対するランニングコストを考えれば費用対効果には疑問も抱いてしまったのは事実であった。

また、八代市は2022年に新しい庁舎が完成した。内部は八代産の杉などぬくもりある木を基調としたデザインである。

新庁舎は2016年の熊本地震で被災した旧庁舎があった場所に建設した。地上6階（一部7階）建てで延べ床面積は約2万7400平方メートル。震度7程度の揺れにも耐えられる免震構造を採用した。1階と2階に市民の交流活動の拠点として多目的ホールや会議室が配置されている。特筆すべきは議場で、ベビーカーをも許容する親子傍聴席が設置されているのは先進的であると感じた。

（3）鹿児島県霧島市

ア 霧島市こども館について

霧島市こども館すかいぴあは令和3年7月に旧国分展望台を1億8000万円かけて大幅な改修工事をしてリニューアルオープンした。

運營業務はプロポーザル審査を経て決定した事業者へ業務委託されている。未就学児から小学生まで年齢別にエリアが分かれていて、屋内にも、乳幼児を対象としたあそび広場や授乳室がある。一番上の階には休憩室を兼ねた展望台があり国分の街や桜島、錦江湾を一望できる風光明媚な立地であった。しかしながら、その立地ゆえ交通アクセスは決して良いとは思われず、公共交通がないために保護者らが自ら車での移動を余儀なくされる点は年間利

用数が令和 3 年 7084 組 21949 人、令和 4 年 10679 組 32866 人という数字に表れ、これら施設が市民によりフル活用されているようには残念ながら見受けられなかった。